

混乱ーさまざまな見方の「歴史」に触れてー

雨の中のツアー最終日、
みなが顔をあわせるのは最後となったその日の夕食時、
それは、先生のお話、感想などをわかちあう場となりました。

あまりに濃い2日間だったので、
言葉にならないのではないかと、とも思っていたのですが、
大半の参加者は感想を口にしました。

いろいろみて混乱している、という感想もありました。
口にうまくだせず涙だけがこぼれている子もいました。
あまりに知りすぎていたせいかショックを受けない自分がショックだった、
という先生がショックを受けた発言もありました。

(2011年発売の週刊文春、「私の読書日記」P126に掲載)

わたしは、「なんかよくわからないけれど、ぞわっとした」という感想が一番印象的でした。
自分が前回、2度と来たくないと思ったのはきっとその感覚をもったからだと思います。
でも、それが熟成するかのように深くなって、今回、数年を経て再訪するきっかけにもなっ
たのです。
その感覚を忘れないでほしいと思っています。



夕食のあとに語る先生

ショックなものをみたあとに語りたい、
語ることで癒されたい、
自分の思いを整理したい

アウシュビッツの収容者もそうだったそうです。
ボランティアで一般の家庭に招かれた解放直後の囚人は、
とにかくだされたものを黙々と食べまくり、
そして、ある瞬間から堰をきったかのように
自分の体験を話したそうです。

自分が見てきたことを話さずにはいられない、
話すことこそが生き残った自分の使命である、かのように、
そこに自分が生きている実感を見出したいかのように

今回宿泊したキリスト教系の施設もそのような趣旨で建てられたそうです。
アウシュビッツを訪れた人が集い、祈り、語る場として
フロントには、ポーランド出身の前教皇・ヨハネ・パウロ 2 世の写真や本が
並んでいました。



宿泊した施設のフロント

そういえば、現教皇（当時）であるドイツ人のベネディクト 13 世が
数年前ビルケナウを訪れたとき、大きな虹がでたそうです。

思い起こせば、私が最初にアウシュビッツにきたとき、
ヨハネ・パウロ 2 世がクラクフに滞在中でした。
窓から教皇が顔をだされる、ということでしばらく待っていましたが、

体調がすぐれないとかで拝見できませんでした。

またアウシュビッツを訪れることになったのも、
見えざる縁に導かれた何かの宿命だったのでしょうか……
そう思わざるを得ません。

*教皇ベネディクト 13 世のポーランド訪問は 2006 年 5 月末

<http://www.afpbb.com/article/life-culture/religion/2062486/591078>



ビルケナウでガイドのモニカさんに質問する先生